

馬鹿になれる兆しあり



鬼北町企画財政課
課長補佐
兵頭 誠亀

「もつと馬鹿になれや」

「馬鹿になるのはなかなか難しいが、今回の分科会に参加して、これから本当に馬鹿になりたいと思う」…これは、鬼北町の分科会に参加されたある方の感想である。私たちお迎えする立場の者にとって、最高の誉め言葉である。

2年前(07年)の夏、私は「広見川夢の会」の当時の会長である故酒井哲夫氏を訪ね、全国大会と分科会の趣旨を説明し、協力を要請した。会長は笑顔で私を昼食に誘った。「兵頭君は、何をしたいの？」私は意味を理解できず首をかしげたが、会長は続けた。「分科会をすることがあなたの仕事なのか？事業をこなすのが仕事か？成功したらそれでよいのか？」さらに続けた。「地域づくりは、行事をこなすことではないやろ。他の団体には相談したのか？この分科会は、遠方から来られる参加者だけのものにするのは

もつたいない。地元の見知らぬ団体同士が、この大会をうまく利用したらいいんのか。もつと馬鹿になれや」…私は、はっと思ひ、会長の言葉の意図を理解した。会長が言われた「私の仕事」を自分なりに吸収しようとした。

「やっちみるか」

鬼北町は、平成の合併で、旧日吉村と旧広見町が合併した町である。2つの町村には、それぞれ合併前から地域を愛し、率先して馬鹿になれる人がいる。「日吉一希を起こす会」、「三島明日を考える会」、「安森洞保存会」、「愛治来夢(あいじらいむ)」、「愛治母愛夢(あいじぼえむ)」、「好藤Y.Y.C.」、「太鼓集団魁」など。今回の分科会は、「広見川夢の会」だけでなく、町内他の団体の仲間たちが思う地域づくりを、分科会に取り入れようと、合同開催を持ちかけた。

各団体の現状は、ある程度似かよっている。テーマは違っても、地域への想いを持って、地域づくり活動を展開している。しかし、皆、年間の活動と仕事と家庭、精一杯の姿(馬鹿)ばかりであり、行政からの勧誘は意にそぐわない模様だった。私はある意味、それが良いところであると思うが、今回は私も引き下らない。分科会の合同開催は故酒井会長の提案であるが、すでに、合併後の地域づくり活動に必要なものと私自身の想いが強かったから。

その後、何はともあれ、各団体数名ずつ集まってもらい、想いの丈を語った。私の心配をよそに、「やっちみるか」ということになった。地域づくりに携わる者たちは、熱い想いを理解するのは早い。私が嬉しかったのは、初対面の者同士が、分科会の話をつきかけに、活動の内容や町の話話を語り合っていることだ。馬鹿になれる人にとっては、当然のことであるが、ようやく灯りが見えた夜となった。

愛媛大会を迎えて

話が決まれば、後は早い。この準備をするための話し合いの「段取り八分」が決まってからは、スムーズな準備、連携ができた。分科会の前夜までに準備はできた。普通であれば、気合十分というところ